

八城赤羽根遺跡

—— (主) 松井田下仁田線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1 9 9 1

群馬県松井田町教育委員会

八城赤羽根遺跡

—— (注) 松井田下仁田線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1 9 9 1

群馬県松井田町教育委員会

序

現在、松井田町では関越自動車道上越線建設、北陸新幹線建設をはじめ、各種の開発が進んでおります。このような中で、町の生活環境にも変化が見られるようになっております。

このたび、関越自動車道上越線開設工事に伴う松井田インターチェンジ（仮称）に接続される、県道建設工事の実施に先立って、該当地域の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。今回の調査では、縄文時代と中世の遺構遺物が見つかりましたが、隣接する上信越自動車道関係発掘調査で見つかっている遺跡とあわせて、この地域の歴史の解明と、文化財の理解のために少しでも役立てば幸いです。

また、現地での調査から、整理作業、報告書の刊行にいたるまで、御指導、御協力いただきました。関係の各機関や関係者の皆様にあつく御礼を申し上げます。

平成3年3月25日

松井田町教育委員会

教育長 宮下 初太郎

例 言

- 1 本書は、(十) 松井田下仁田線道路改良工事に伴う八城赤羽根遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査遺跡の地番は、群馬県碓氷郡松井田町大字八城赤羽根1471-1ほかである。
- 3 発掘調査事業主体者は、松井田町教育委員会である。
- 4 調査は松井田町教育委員会で行った。

組織

教 育 長	宮下初太郎
社会教育課長	土屋 美
文化財保護係長	伊藤 節夫 (平成2年11月30日まで)
	清水 博 (平成2年12月11日から)
文化財保護係	水澤 祝郎 (調査担当)

- 5 発掘調査は、昭和63年12月14日から平成元年2月10日まで実施した。整理作業は、平成2年12月1日から平成3年3月25日まで実施した。
- 6 本調査にかかわる出土資料、記録資料の全ては、松井田町教育委員会が保管している。
- 7 整理作業は廣瀬若江、原田和文、浦野昇平、扇込侘子、前村小夜子が行った。
- 8 本書の編纂、執筆は水澤が行い、石器の実測は綿田弘美氏(財団法人長野県埋蔵文化財センター調査研究員)に作図をお願いした。石器の石材鑑定は小林二三雄氏にご教示を賜った。縄文土器の観察については菊池英氏(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団主任調査研究員)にご教示を賜った。
- 9 本書に掲載した写真は、遺構写真を水澤が、遺物写真を廣瀬が撮影した。
- 10 実測、トレースは廣瀬が行い、拓本は廣瀬・浦野が行った。
- 11 調査及び報告書作成にあたり、次の関係各機関・各諸氏より多大な御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

協力機関：群馬県道路建設課、安中土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、茨山土木舗装株式会社

協力者：飯沼淳一、真下高幸、小林二三雄、菊池 実、綿田弘美、上原高次、吉沢 茂

- 12 発掘調査参加者は次のとおり。

新居 颯	岡村千代美	小此木敏江	小此木よし子	門壁さかえ
門塚 孝	神戸 数子	神戸 直子	小坂廣 五郎	斎木 恒男
土屋 道江	中島 久	野田 嗣子	野田 護也	伏田 和代
矢野田利子	山田 和吉	若松 菊子		

凡 例

- 1 本書の挿図に使用した方位記号は磁北を示す。
- 2 本書での遺構実測図、遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

遺構	住居跡	1/40
	堀	1/100

遺物	土器片	1/3	土器拓本	1/3
	石器	1/3		

- 3 遺物番号は、通し番号とし、実測図、観察表が共通している。
- 4 遺物観察表中の()は完成品以外の推定値、復元値を表わす。
- 5 遺構図面に使用したスクリーンパターンは下記のとおりである。



焼土

- 6 本書で使用した地形図は図-1 国土地理院5万分の1地形図を複製し、松井田町が作成した7.5万分の1の地図を使用した。図-2 国土地理院2.5万分の1「松井田」使用。図-3 国土地理院の地形図を基に松井田町が作成した2.5万分の1の地図を使用した。

目 次

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境	1
I 発掘調査の経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 位置と環境	4
III 順 序	10
第2章 遺構と遺物	11
I 遺 構	11
II 遺 物	15
第3章 ま と め	22
写真図版	25～38

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境

I 発掘調査の経過

1 調査に至る経過

群馬県内における大規模な開発の波は、松井田町においても例外ではない。松井田工業団地造成や町内延長19.5kmにも及ぶ上信越自動車道の建設など、多くの開発事業が行われる中で、私たちの居住環境にも変化があらわれようとしている。

各種の開発行為により、数多くの文化財が破壊されていく中において、その保護・保存対策は現代社会における課題のひとつとしてあげられる。避けられぬ開発に対しての万策として、発掘調査による「記録保存」の処置が行われている事実もあげられる。

発掘調査 関越自動車道上越線松井田インターチェンジに接続するアクセス道路（県道）建設工事に伴い、安中土木事務所より群馬県教育委員会あてに埋蔵文化財発掘調査の依頼があり、これを受けた群馬県教育委員会は、調査の実施について松井田町教育委員会に依頼し協議された。その結果、松井田町教育委員会により発掘調査を実施することとし、昭和63年12月1日付けで群馬県知事と松井田町長との間で調査委託契約を締結し現地調査を実施した。

整理作業 整理事業の実施についても、安中土木事務所より群馬県教育委員会に依頼があり、これに基づいて、松井田町教育委員会において実施することとし、平成2年12月1日付けで群馬県知事と松井田町長との間で調査委託契約を締結し事業が実施された。

2 調査の方法と経過

発掘調査（昭和63年12月14日～平成元年2月10日）

調査は工事予定地内全面を対象として行うこととしたが、北側斜面については遺跡の想定範囲外と考えられ、調査対象から除外した。現場作業は12月14日の機材運搬に始まり、道路延長方向にあわせて重機（バックホー）により2本のトレンチを並行に設定し、該当区域における遺跡の拡がりを確認する作業を行った。その結果、遺構の拡がりを確認できた場所については、調査区として拡張することとして表土除去を行い、計3カ所の調査区を拡張した。これについては、南からそれぞれA区・B区・C区と名称して便宜をはかった。

各調査区の作業進行は、重機による表土除去後に遺構確認のため、人力による精査を行い、遺構分布の全容確認に努めた。その結果、A区では縄文前期の遺物が出土する包含層、B区では縄文時



調査風景

C区包含層

代前期の竪穴住居跡と中世の堀跡、C区では縄文時代の遺物を出土する包含層が確認された。

B区の堀跡については、規模が大きく、覆土の除去作業に手間取ったが、遺構の損傷を最低限に押さえることを考えて、全て人力により進化した。当初予想された、水の流出による障害もほとんどなく、順調に作業が進行した。

整理作業（平成2年12月1日～平成3年3月25日）

遺物の整理作業は、洗浄・注記に始まり、順次接合復元・実測・トレース・破片の拓本・写真撮影・写真及び図版版下作成と進めた。その間に、現場で作成した遺構実測図・調査区全体図等の各種図面類の点検作業を並行して行い、トレース・図版版下作成等の遺構関係整理作業を行った。

区分	月	昭和63年 12 14	平成元年 1	2 10
諸準備		—		
確認調査		—		
表土掘削			—	
遺構検出			—	
遺構表測			—	
写真撮影			—	
現場後始末				—

表-1 発掘調査工程

区分	月	平成2年 12	平成3年 1	2	3
遺物 整理	接合・復元	—			
	作 図	—			
	ト レ ー ス		—		
	拓 本			—	
	写 真 撮 影			—	
遺構 整理	図面整理	—			
	ト レ ー ス		—		
報 告 書	レイアウト			—	
	写真図版版組			—	
	図版版組			—	
	原稿作成				—
	校 正				—

表-2 整理作業工程

II 位置と環境

地理的環境

八城赤羽根遺跡の所在する松井田町は、群馬県西部に位置し、北は倉湖村、東は安中市、南東は妙義町、南西は下仁田町、そして西は碓氷峠をはさんで長野県北佐久郡軽井沢町と接する。

今回調査された八城赤羽根遺跡は、妙義山の麓、松井田町のほぼ中央を東南東方向に流れる碓氷川の右岸、西横野丘陵にそった上位段丘上に位置し、標高は 362m で北東にむかって緩やかな傾斜を示している。



調査地から南西を望む

八城赤羽根遺跡は妙義山のふもとに位置する

歴史的環境

八城赤羽根遺跡周辺を行田・源ヶ原地区からは、従来より縄文時代の遺物の散布が多く確認されており、上信越自動車道関連の発掘調査でも集落及び配石遺構等が濃密に検出され、該当地区の遺跡分布の状況を提示する結果が得られている。これらの状況から、当遺跡地に於いても縄文時代を中心とした集落跡の検出が予想されたが、調査の結果としては前期の遺跡としてわずかに認められたのみとなった。

ここで、当遺跡を中心とした周辺地域における遺跡の分布状況について、概観してみよう。

●縄文時代集落（八城・行田／源ヶ原地区）

従来から、縄文時代中期を中心とした遺物の散布が濃厚に認められ、遺跡地としての認識がもたれている地域である。発掘調査による資料はないが、耕作時による検出や、工事等に伴った遺物が多く見られる。

●古墳

松井田町における古墳の分布については、厚原・足名田・法正寺地区の古墳群を除いて、そのほとんどが碓氷川の左岸以北に分布し、当遺跡周辺においては確認できない。ただ、削平された古墳については表面での確認ができないため、今後の発掘調査で検出される可能性については否定できない。

●奈良・平安時代集落等（五料・新堀地区）

周辺地域での確認されている分布は少なく、現状では碓氷川左岸で見られる。集落遺跡の可能性としては新堀西下原が考えられるが、遺物発見の原因となった土地改良事業により、その大半が破壊されていると考えられ、詳細については資料が存在しない。

五料山岸遺跡は、住居跡の他に溝状遺構から多数の須恵器が検出されており、周囲での窯跡の存在を示唆するものと考えられる。また、生産遺跡としては新堀社宮司で浅間B軽石降下により埋没した水田跡が検出されており、その範囲は西下原の北部にまで達していると考えられる。

参考文献

- ・松井田町文化財調査委員会編『松井田町の文化財』松井田町教育委員会 1974
- ・『松井田町の文化財（改訂版）—歴史散歩—』松井田町教育委員会 1986
- ・『松井田町誌』松井田町誌編さん委員会 1985
- ・山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』群馬県文化事業振興会 1972

No	遺跡名	時代	遺跡の概要	備考
1	(高梨子門坂)	弥生	弥生時代後期の構式土器が散布する。	表面採取による。
2	(高梨子三次郎)	縄文～平安	縄文土器・石器・土師器・須恵器が散布する。	表面採取による。
3	(新井白石)	縄文	石斧の散布が認められる。	*
4	松井川西城跡	中世	諏訪旧馬の居城と伝えられる。	
5	松井川城跡	中世	安中氏、武田氏、を経て北条氏の重臣大洞寺駿守政繁により現在の城が形成された。天正18(1590)年に前田利家を総大将とする北国勢により落ちる。昭和60年度林道開設計画により事前の発掘調査が行われ、青磁、古瀬戸、刀子、石臼等が出土した。	一部発掘調査実施 (松井川町教育委員会、S.60～61年度)
6	五科山岸遺跡	奈良～平安	竪穴住居跡2軒、溝状遺構を検出した。溝状遺構からは多数の須恵器を中心とした遺物が出し、周辺での窯跡の存在を示すものと思われる。周辺は平にかけて遺物の散布が見られる。	発掘調査実施。(松井川町教育委員会、S.63年度)
7	(新堀西下敷)	縄文～平安	縄文土器、土師器、須恵器、布目瓦、子持勾玉が出土した。一帯は各期の複合遺跡として濃密な分布があるものと思われる。	土地改良事業
8	(新堀社宮司)	平安	B軽石埋没による水田跡が検出された。北西から南東にかけて現在の土地利用ともある程度関連を持ちながら、水田跡の広がりが見られるものと考えられる。	松井川町役場庁舎建設試掘(松井川町教育委員会H.2年度)
9	(五科滝名田)	平安	土師器の散布が見られる。	表面採取による。

※上信越自動車道の遺跡については、調査中につき掲載していない。

表-3 周辺遺跡の概要



A - 八城赤羽根遺跡

○ - 古墳 田 - 散布地等 □ - 城鎮等

圖-1 周辺圖 1 : 25,000

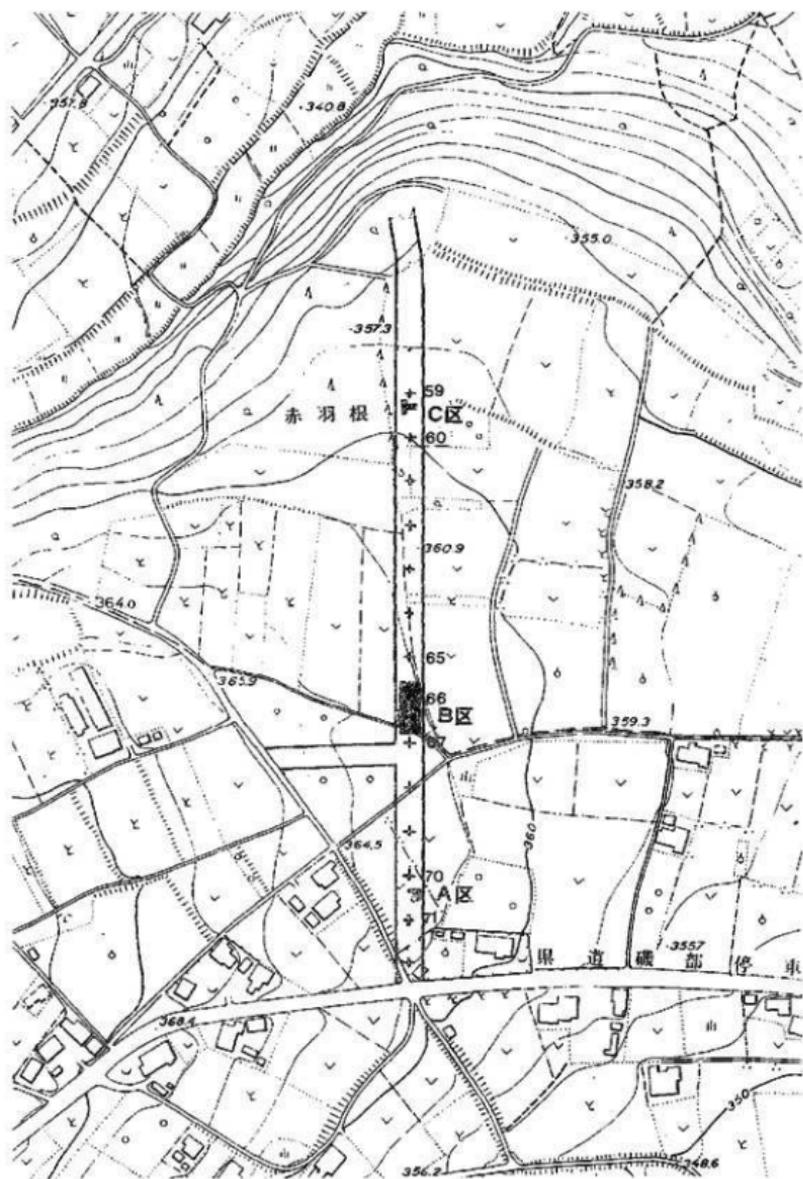
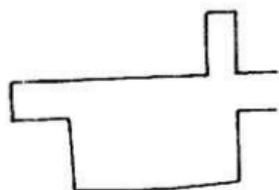


图-2 調査区全体図 1:2,500

A区

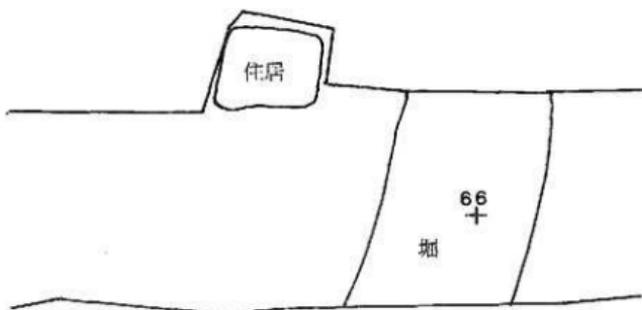
71
+



70
+

B区

67
+

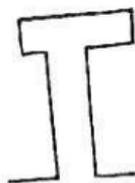


66
+

畑

C区

60
+



59
+

図-3 グリット図 1:200

Ⅲ 層 序

調査区域内では、表土下に部分的に浅間A軽石層・B軽石層の純層堆積が見られる。縄文時代前期の遺物が出土する層は、概ねソフトローム層上面からB軽石下の黄褐色粒を含む黒色土層の間である。松井田町においては、A・Bの両軽石層の純層が層序をなして観察できる場合が多く、そのうえ各軽石層内の堆積状況が比較的良好に読み取れるので、今後の詳しい調査が期待できる。

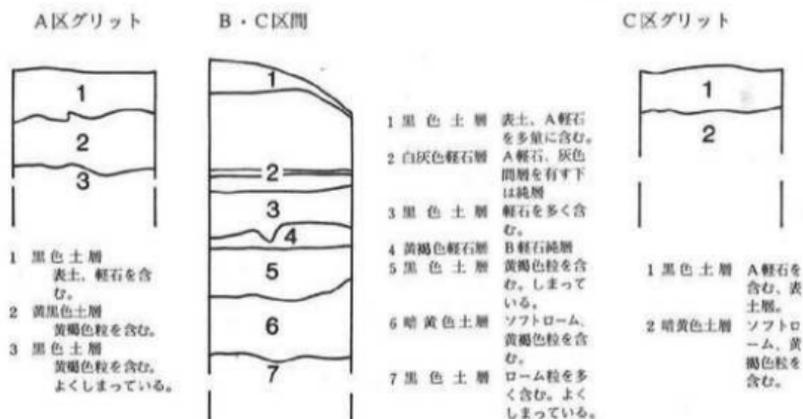


図-4 基本層部



土層堆積状況

B軽石、A軽石が明確に確認できる。

第2章 遺構と遺物

I 遺構

調査区域は、南から北にむかって概ねA区からB区・C区へと標高を減じて、3段階の平坦面をなしている。

今回の調査で検出された遺構は、A区では縄文時代前期の包含層、B区では縄文時代前期の竪穴住居跡1軒と中世の堀跡1条、C区では縄文時代包含層を検出した。A区包含層での遺物出土状態は、表土層下の黒色土からソフトローム層の上面までの土層が包含土層となっている。C区包含層では、表土層の下がソフトローム層となり、このソフトローム上面で遺物が出土している。出土遺物は、図示した石器のほかに縄文時代前期の土器をわずかに出土したのみである。

住居跡

B区の中央の西寄りに位置する。平面規模は、東壁側で3.44m、西壁側で3.3m、北壁側で2.27m、南壁側で2.75mをはかり、やや不整の長方形を呈する。確認面からの深さは概ね0.2～0.25mを測るが、耕作による削平を受けており掘込み面は更に上層になるものと考えられる。

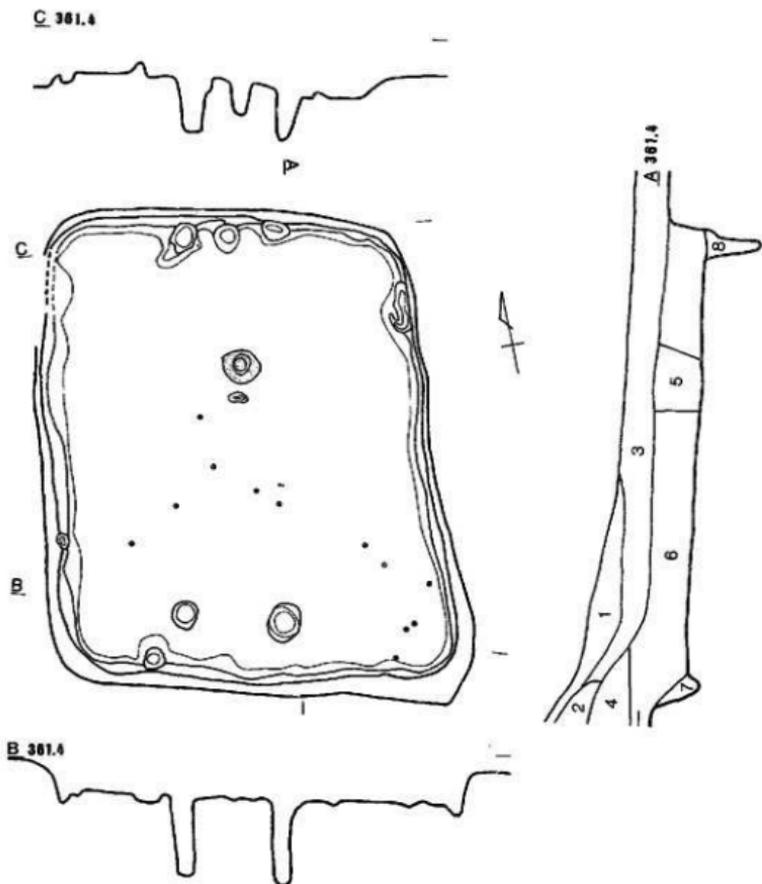
床面はローム層により構成され、ほぼ平坦で堅くしまり、ピット、壁周溝、わずかな焼土が検出された。ピットは北壁ぎわに3基、南壁ぎわに3基検出されている。

北壁ぎわのピットは壁周溝内にある。規模は東側が0.2m×0.14mの平面楕円形を呈し、深さは0.38mを測る。中央のピットでは、径0.18mのほぼ円形を呈し、深さは0.23mを測り、両側のピットより掘込みが浅い傾向が見られる。西側のピットは、径0.28mで深さ0.38mを測り、他の2つのピットよりややつくりが大きい。

南側のピットは、床面上に2基、壁周溝内に1基認められる。床面上にあるピットでは、東側ピットが径0.24mのほぼ円形を呈し、深さ0.61mを測る。西側ピットは径0.17mの円形で、深さ0.59mを測る。また壁周溝内ピットは径0.16mの円形を呈するが掘込みはやや弱い。他に東西壁周溝内に2つのピット状の掘込みがあるが、明確ではない。

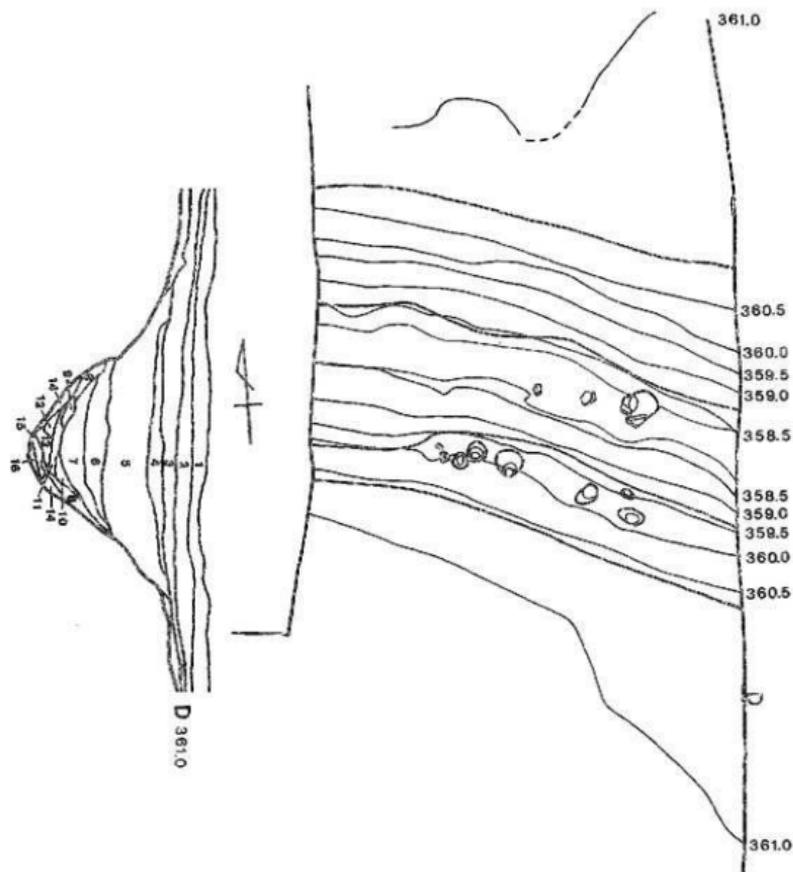
床面中央やや北寄りに、径0.25mのほぼ円形に赤褐色の焼土を検出した。これを除去したところ0.07mのくぼみとなった。また、全体にしまつて平坦な床面の中で、この焼土を含んだ中央部は、東西幅0.4m～0.5m、南北長1.2mにわたる不整形なわずかなくぼみとなっている。

遺物(図一7)は、26点を計測し取り上げたが、破片のみであり図示したものは13点のみである。出土状況は、中央部と南東部にそれぞれ集中して分布している。



- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1層 黒色土 | 表土A軽石を含む。 |
| 2層 白灰色土 | A軽石純層。 |
| 3層 黒色土 | A軽石を多く含む。 |
| 4層 黒色土 | 軽石粒を少量含む。 |
| 5層 黒色土
(腐土) | A軽石を含む、わずかなローム粒を含む。 |
| 6層 黒色土 | よくしまっている、ロームブロック、軽石粒を含む。 |
| 7層 黒色土 | よくしまっている、ローム粒、軽石粒を多く含む。 |
| 8層 黒色土 | よくしまっている、ローム粒、軽石粒を多く含む。 |

図-5 住居跡



- | | | | | | |
|----|-------|------------------|-----|-------|-----------------------|
| 1層 | 黒色土層 | 泥上層、A 礫石を含む。 | 9層 | 灰黒色土層 | 軽石層、小粒、ローム塊を含む。 |
| 2層 | 黒色土層 | ややしまっている、黄色粒を含む。 | 10層 | 灰黒色土層 | ロームブロック、軽石(大)を含む。 |
| 3層 | 黒色土層 | ややしまっている、軽石粒を含む。 | 11層 | 明黒色土層 | ローム塊を多く含む、やや砂質、軽石を含む。 |
| 4層 | 明黒色土層 | ロームブロックを多量に含む。 | 12層 | 黄黒色土層 | やや砂質。 |
| 5層 | 明黒色土層 | 軽石主体。 | 13層 | 明黒色土層 | ローム塊を多く含む、やや砂質。 |
| 6層 | 灰黒色土層 | 軽石層(水気有) | 14層 | 黄黒色土層 | ローム層主体。 |
| 7層 | 灰黒色土層 | 軽石層、小粒。 | 15層 | 灰黒色土層 | 軽石少量含む。 |
| 8層 | 黄黒色土層 | ローム塊を多く含む。 | 16層 | 灰黄色土層 | 粘土をおびる。 |

図-6 掘跡

堀跡

B区の北部に位置し、西北西—東南東方向に走り、南方向に向ってやや弧をえがく。規模は、

	東部	中央部	西部
上幅	5.85m	5.35m	5.3m
下幅	0.59m	0.58m	0.7m
深さ	2.61m		2.5m

となっている。

掘り方は葉研形を呈し、ローム層面を掘り込んで形成されている。南壁面の中央部では、中段上位にピットが並んで検出されている。規模は概ね径0.2~0.3mで、0.1m程の掘り込みを有す。底部の標高は東側が0.1m程低くなっており、流路として考えた場合には西から東への方が考えられる。

土層堆積状況を見ると、下部は自然堆積を示すが、中層以上については人為的に埋めた可能性が強い。特に、東部の土層上部に見られるロームブロックを多量に含む埋土は、ほぼ埋まりきって窪み程度になったところに、明らかに人為的な埋土を行っている様子がうかがえる。

遺構の性格について、流路としての可能性は、土層の堆積状態から考えると否定的である。底部の堆積状況は、水流による二次堆積の砂層が確認できたが、ほかに0.2m~0.4m程の石が数個確認されたのみであり、流路としては考えにくい。また、ローム層を掘り込んだ底部には水流により削られたと思われる明確な痕跡は存在せず、これからも流路としての機能は否定的である。しかし、底部近くで両壁面の角度がやや急に落ち込んでおり、水流による浸食とも考えられ、完全には否定できない。現状では、人為的に掘り込まれた掘跡ととらえておく。

遺物(図-12の105)は鉄鏝1点のみである。



掘跡作業風景

II 遺物

1 縄文土器

a B区住居跡出土

- 1～4 C字状連弧文
- 5～6 L無節斜縄文
- 7 R無節斜縄文
- 8 L R半節斜縄文
- 9～12 L R半節斜縄文とR無節斜縄文
- 13 関山式

b A区包含層出土（94は表採）

- 14 関山式
 - 15～21 半截竹管による平行沈線文
 - 22～30 櫛歯状工具による刺突文（烈点状刺突文）
 - 31～34 半截竹管による爪形文
 - 35～44 L無節斜縄文
 - 45～47 R無節斜縄文
 - 48～57 L R半節斜縄文
 - 58 L R半節斜縄文（0段多条）
 - 59～70 R L半節斜縄文
 - 71 L R半節斜縄文（直前段多条）
 - 72～75 R無節斜縄文とL無節斜縄文
 - 76 L R半節斜縄文とR無節斜縄文
 - 77～78 L無節斜縄文とR L半節斜縄文
 - 79 R L半節斜縄文とL R半節斜縄文
 - 80 R L半節斜縄文とL無節斜縄文（0段多条）
 - 81 R L半節斜縄文（付加条）とL R半節斜縄文
 - 82～83 L R半節斜縄文（0段多条）とR L半節斜縄文
 - 84～95 R L半節斜縄文（0段多条）とL R半節斜縄文（0段多条）
 - 96～98 L R半節斜縄文とR L半節斜縄文（0段多条）
 - 99 L R複節斜縄文（前前段反撚）
- ※14・15・17・18・22以外に織織を含む。

2 その他の遺物

A区・C区（101）包含層より石器が5点、B区掘跡より鉄鏡が1点出土した。

No.	器 種	全 長 (cm)	横 巾 (cm)	厚 さ (cm)	石 質	備 考
100		6.2	6.3	2.4	凝灰質砂岩	重量 116g
101	石 斧	12.3	5.0	1.8	硬 砂 岩	重量 158g
102		11.6	4.3	1.0	緑 泥 石	重量 94g
103		8.1	4.7	1.4	頁 岩	重量 90g
104		5.2	3.6	0.6	スレート	重量 14g
105	鉄 鏃	7.7	(3.0)	1.0	—	重量 23g

表-4 その他の遺物観察表

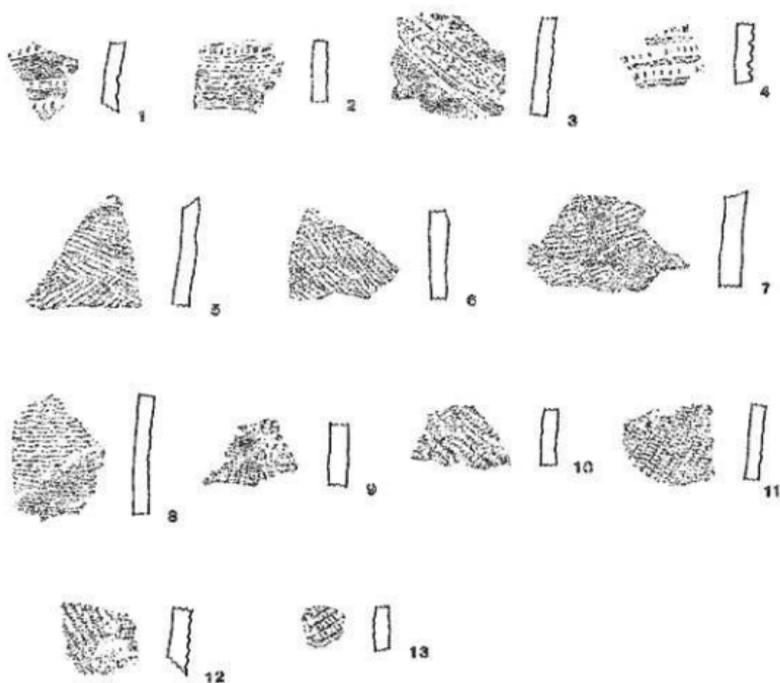


図-7 遺物 住居跡

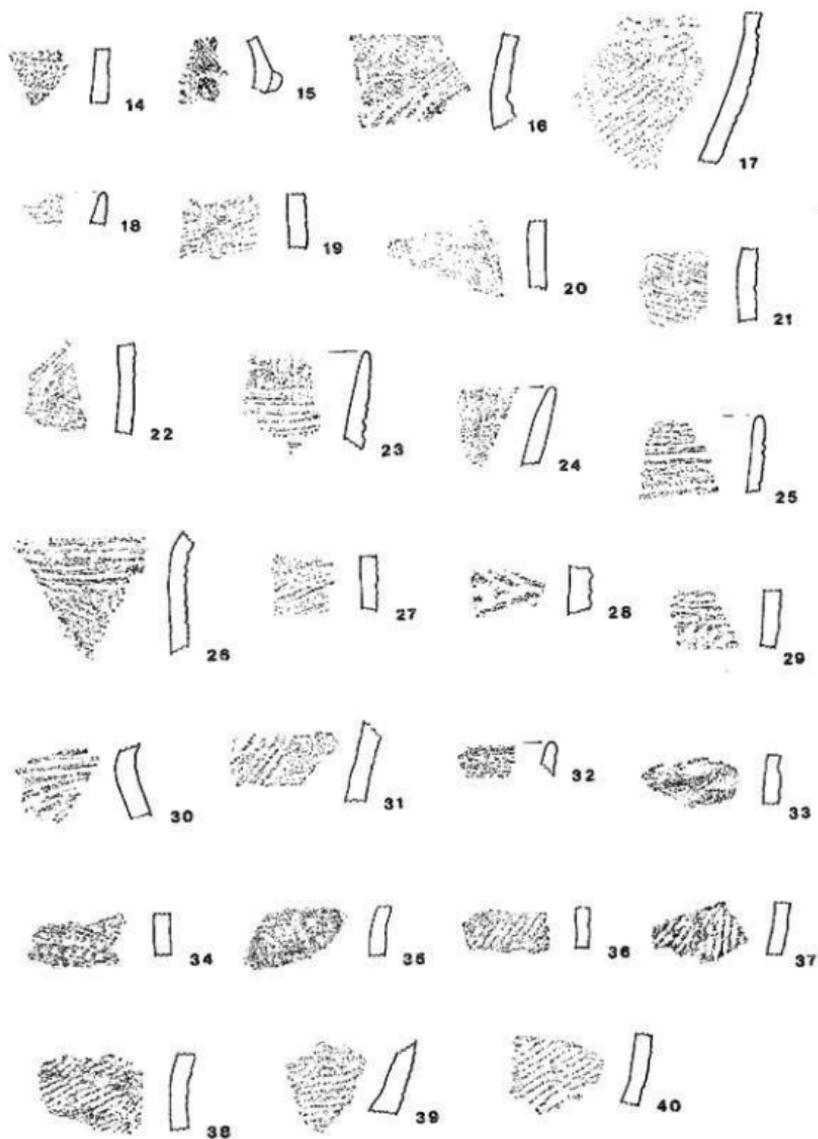


图-8 杂物 包含层

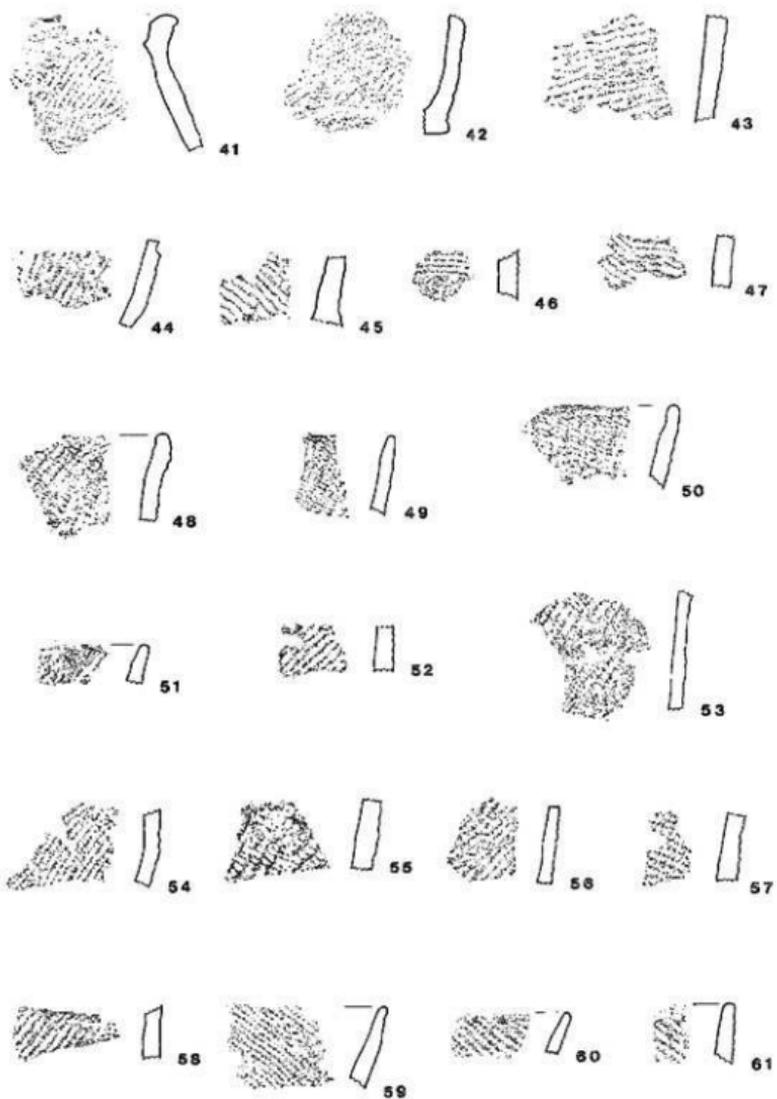


图-9 遗物 包含图

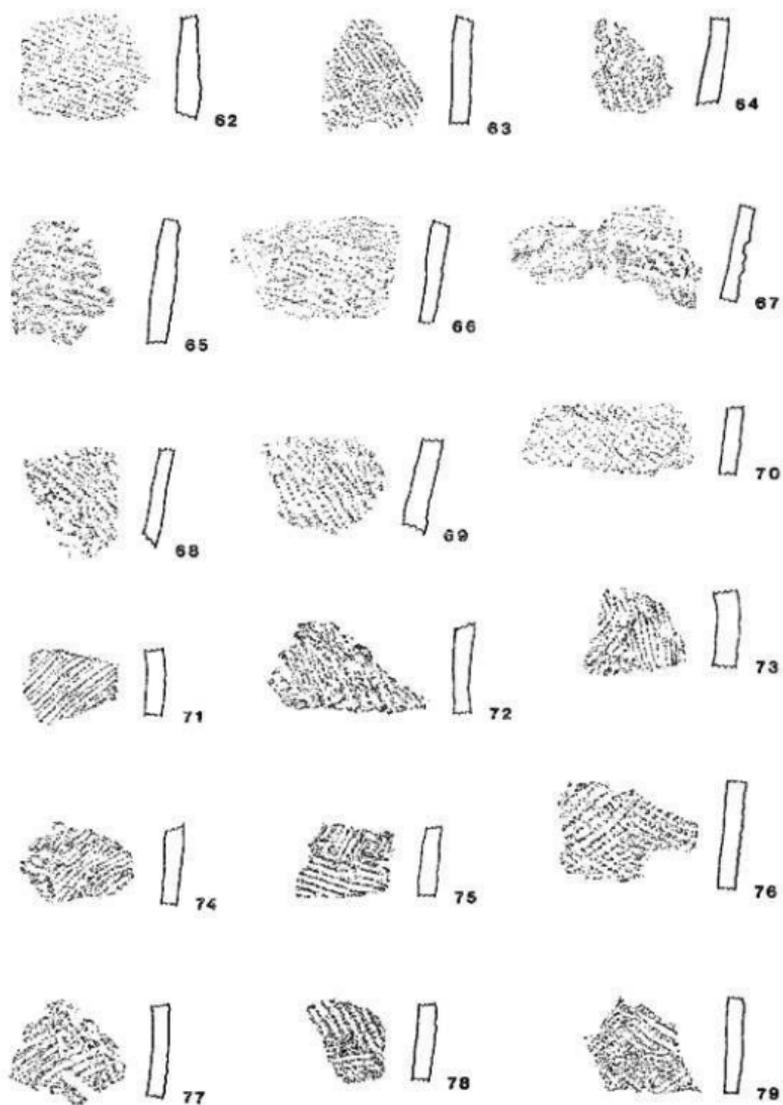


图-10 遺物 包含層

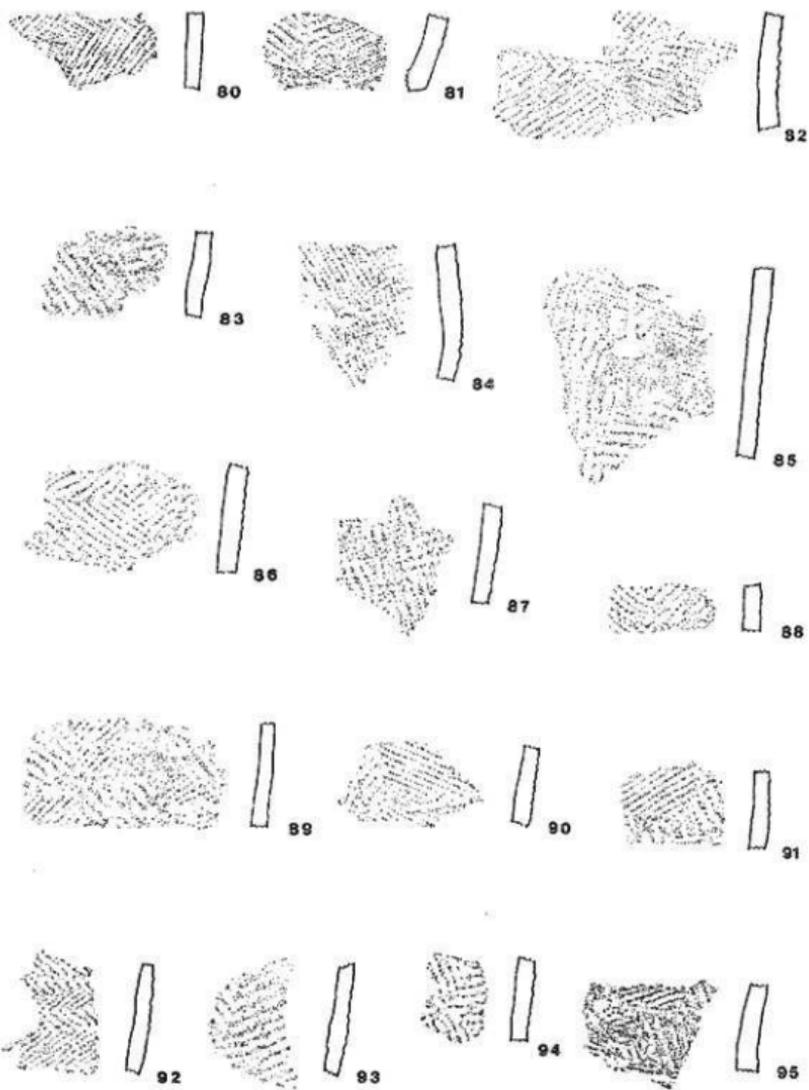


图-11 遺物 包含層・表採(94)

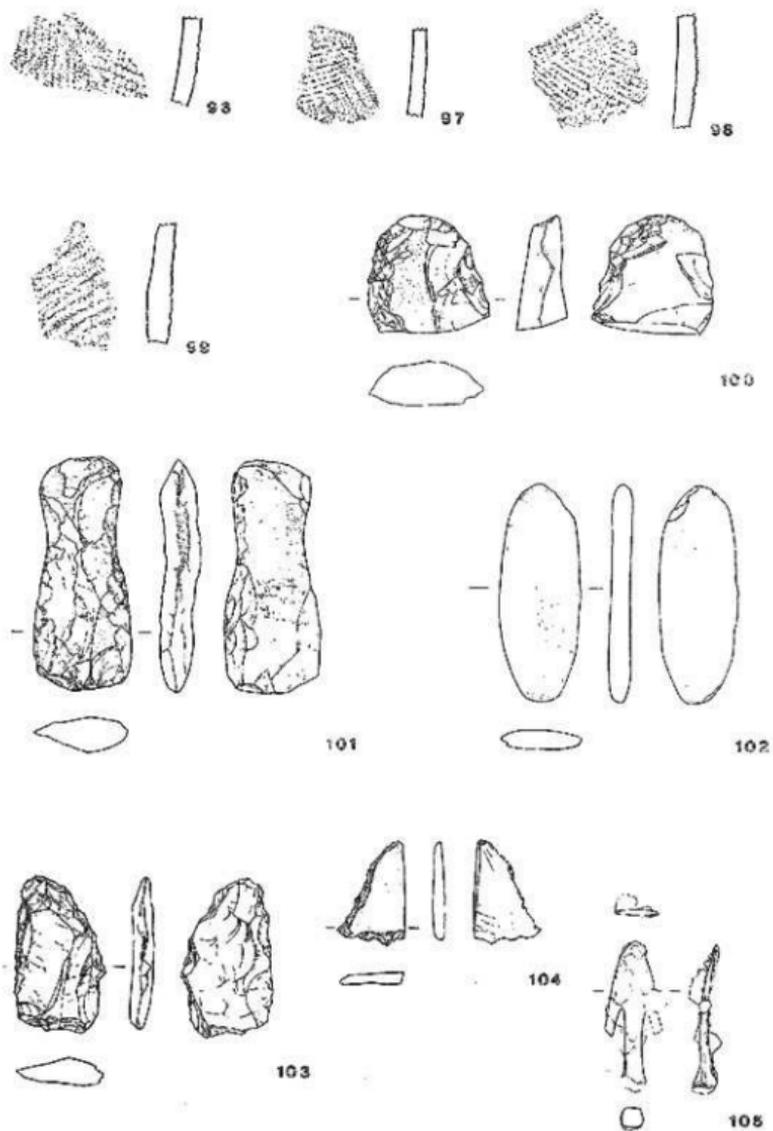


圖-12 遺物 包含層・埋跡

第3章 ま と め

八城赤羽根遺跡の調査について、検出した遺構・遺物及び周辺の変跡の状況をあわせて、若干の考察を加えてまとめたい。

〈検出した遺構・遺物〉

縄文時代 前期 竪穴式住居跡1軒、前期の上器、石器

中 世 堀跡1条、鉄鏝1

包含層/竪穴式住居跡

今回の調査区は、その立地状況から縄文時代中期を中心とした集落の検出が考えられていた。調査区全域にわたって、遺跡の拡がりを探るためのトレンチをいれたところ、遺構・遺物の集中する地区が認められ、各地区について拡張して調査を行った。その結果、濃密な状況ではなかったが、縄文前期の遺跡としての検出となった。今回の調査では、包含層の他に住居跡は1軒のみの検出であり、集落遺跡としての構成については言及できない。

松井田町における縄文時代前期の遺跡については、干駄木遺跡を除いては過去に発掘調査例はなく、散見される遺物は工事や耕作により出土したもののみである。ただし、上層越自動車道関係の発掘調査においては、岡山・黒沢・諸隈各期の遺跡が検出されており、調査終了後の報告待ちの状態となっている。

碓氷川右岸では、西横野丘陵1に前期の分布があると考えられ、左岸では松井田丘陵上、更に北について、九ノ川左岸の細野丘陵上において前期の遺物が確認されている。松井田町西部においては発見例が少ない。

現状での分布の状況は以上であるが、将来的な発掘調査例の増加により、町内の丘陵上を中心とした、広範囲にわたる検出の可能性が考えられるところである。

堀跡

今回の調査で検出された大型の溝状遺構については、出土遺物や遺構の検出状況から中世の堀跡ととらえておきたい。ただし、水路としての溝の性格は否定できない。

周辺での中世遺構の分布状況は、碓氷川右岸の町東部に入見城、大土守城、川田陣屋がある。左岸地域では松井田城、松井田西城等が存在する。しかし、八城赤羽根遺跡に隣接する地域で、今のところ発見例がない。

松井田における中世遺構のなかでも、戦国期を中心とした遺構では松井田城がその中心的役割を果たしている。松井田城の始まりは、伝説によると北条時頼の命により青砥左衛門藤綱が築城し、青淵山松ヶ枝城と命名したと伝えられる。その後、箕輪の長野氏に仕える安中出羽守忠胤が越後国新田から松井田小屋城に入った。この子、忠政の時には武田氏に対する防備のため安中出羽守の築城に入ったが、永禄9（1566）年に武田氏により開城した。その後、武田氏、滝川一益の家臣の津田小平次政秀を経て、小田原北条氏の重臣である大道寺駿河守政繁の時代に移る。政繁は城の増強に努め、現在の松井田城の姿を築きあげた。間もなく豊臣秀吉の小田原征伐により、天正18（1590）年に前田利家、上杉景勝、真田昌幸、毛利勝永、松平康国、小笠原道隆の北国勢、信州勢による攻撃を受け、3月19日に落ちた。

この大正18年の攻撃の時に、松井田城を囲む形で陣がはられていたと考えられている。現在これらの陣がはられていたとされる物証は得られていないが、地名から追ってみると小字名に関連すると思われるものが見られる。

「陣場」

八城赤羽根遺跡で検出の堀跡を中世遺構として考えた場合、関連性のある資料の一つとしては、この「陣場」があげられる。

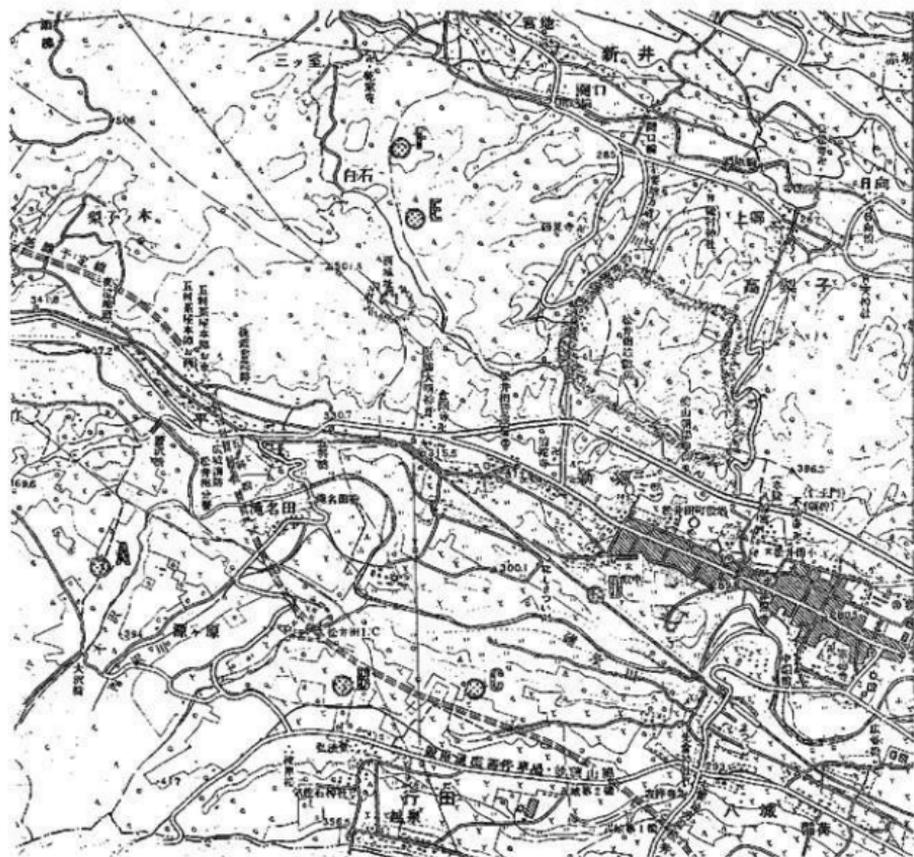
大字八城には八城赤羽根遺跡の名称のもととなった、字赤羽根の東隣に字陣場の名称が見られ、その更に東にも見られる。西には、大字五料字陣場。そして、碓氷川をはさんで八城地区陣場の対岸には、大字新堀字陣場。松井田城跡の西北で松井田西城の北には、大字新井字陣場、大字土塩字陣場が見られる。

「陣場」の小字分布について、単純に見た場合には松井田城を中心として西北・南東・南と逆巻に包囲するかのとき形がうかがえ、松井田城攻めの布陣の場所が小字名に残って伝えられたものとも考えられる。

地名を資料として研究をする分野が最近特に盛んに行われており、多くの成果を得ている。これらの研究は、各地に残る地名から地域の歴史的事象、自然的事象（環境）等に対してのアプローチとしてとらえられる。しかし、どの研究分野でも同様であるが、その研究のもととなる資料の扱いには細心の注意を払わねばならない。研究の前提としての資料批判が厳密に行われてこそ、資料の価値が高まり、研究の有効性が生じるのであり、地名研究に於いても例外ではない。現存する地名を研究資料として用いるとき、その発生がどの時代まで遡ることができるのか、十分な検討を必要とする。今回提示した「陣場」についてもその発生がいつなのかを示す資料がなく、あくまでも資料批判を得る前の段階の、一つの可能性として提示するのみと考えている。

松井田城攻めの布陣地としては、不動寺、金剛寺、碓村神社等の場所を推定するむきが多く、より城域に近い範囲にある。「陣場」の分布はこの点からみてもやや濃い感があり、ここでは否定的な状況にある。

この遺構の性格解明には、中世関連の発掘調査による資料の蓄積と、今後の研究に期待するところが大きい。



- | | |
|---------|--------|
| A 五科陣場 | D 新堀陣場 |
| B 八城陣場 | E 新井陣場 |
| C 八城下陣場 | F 土壘陣場 |

圖版-13 字「陣場」位置圖

写 真 图 版

図版 1



調査地調査前



トレンチ掘削状態

B・C区南から北を望む



調査終了後埋戻し状態

C区南から北を望む



住居跡完掘状態 北から



住居跡遺物出土状態 北から



住居跡セクション

東から



住居跡・ピット検出状態

北壁側



住居跡・ピット検出状態

南壁側

A区包含層遺物出土状態

西から



C区包含層遺物出土状態

東から



C区包含層遺物出土状態



図版 5



B区掘完掘状態



B区掘跡セクション 西から



B区堀セクション 東から

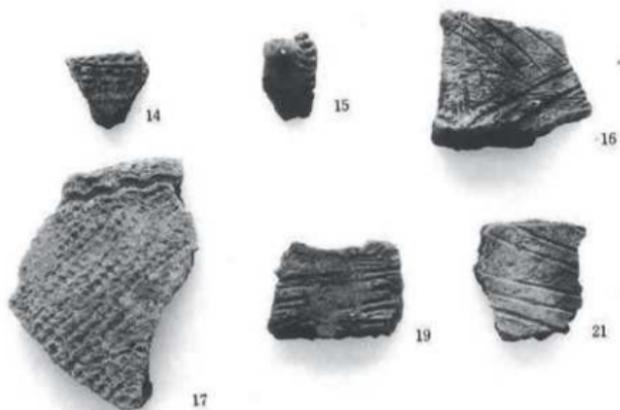
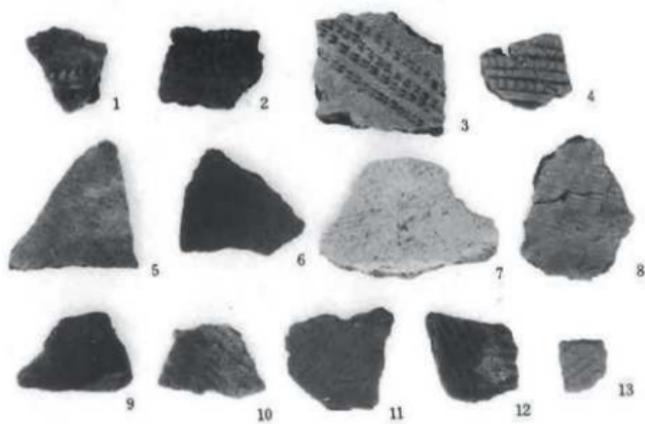


B区堀跡検出状態



B区堀跡遺物出土状態

图版 7





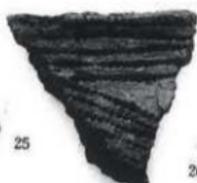
23



24



25



26



27



28



30



31



32



35



38



40



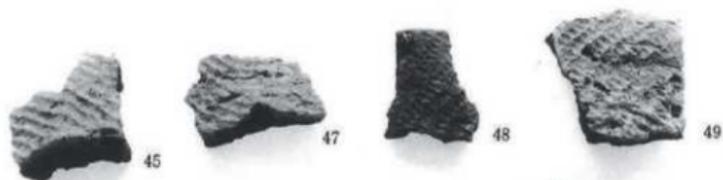
41



42



43









93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



105
表



105
ウ



B区掘跡作業風景

八城赤羽根遺跡

— (主) 松井田下仁田線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日：平成3年3月25日

編集：松井田町教育委員会
社会教育課文化財保護係

発行：松井田町教育委員会

〒379-02 群馬県

碓氷郡松井田町大字新堀1371

TEL 0273 (93) 3335

印刷：隆水印刷株式会社